

チーム  
**Time**  
35号

特集

アレルギーセンター



Topics & News  
帝京大学医学部附属病院からのお知らせ

19

チーム医療

総合診療科 立澤直子先生

18

アレルギーに関するQ&A

16

アレルギーセンターについて

小児科	教授	小林茂俊先生
内科	教授	長瀬洋之先生
皮膚科	教授	鎌田昌洋先生
耳鼻咽喉科	助教	吉原晋太郎先生
眼科	准教授	三村達哉先生
管理栄養士		堤遥香さん
薬剤部		前田光平さん

04

特集 アレルギーセンター

目次

◎発行年月  
2025年3月  
◎発行  
帝京大学医学部附属病院  
総務課広報企画係  
◎編集・制作  
ビーデザイン

T-me

T-me「チーム」は、  
帝京大学医学部附属病院と  
地域の皆さまをつなぐ院内誌です。  
T:Teikyo =帝京大学医学部附属病院の頭文字  
me:Medical =地域の皆さまのための医療

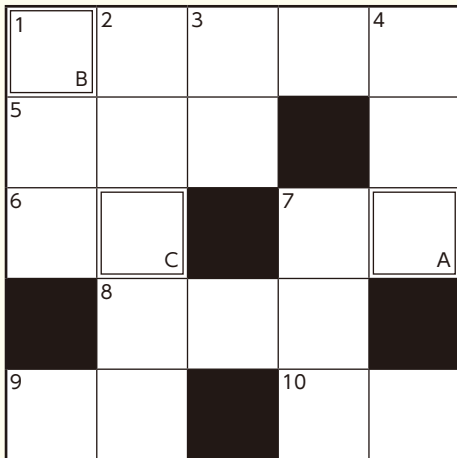
また、「チーム」には  
医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、  
その他病院全てのスタッフが連携して行う  
チーム医療の意味も込められています。

本誌の掲載内容は、2025年3月現在の情報  
に基づいております。

printed in japan  
本紙掲載の写真・記事の無断転用を禁じます。  
©2025 帝京大学医学部附属病院

クロスワードパズル

二重ワクの中に入る文字をアルファベット順につなげると、  
日本人に多いアレルギー物質になります。

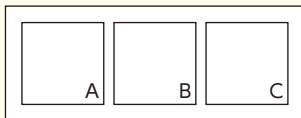


(タテのカギ)

- フリーマーケット、略して？
- 国語、算数、体育…明日の準備をします。
- 缶やペットボトルと一緒に分別を。
- じゃがいもの品種、○○○のめざめ。
- 同じ名前のフルーツと鳥、ニュージーランド名産です。

(ヨコのカギ)

- この生え際の形が美人の条件でした。
- 病気にかかること。
- イチ、ジュウ、ヒャク、セン…。
- かつては高校の数学といえば代数とこれでした。
- 洋装に対して。
- 犬が引くレースがあります。
- 静岡にある地名で、「踊り子」が有名。



(答えは P.19)

# アレルギーセンター

花粉症、食物アレルギー、アトピーなど、  
現代では「3人に2人がアレルギー疾患を持つ」  
とも言われています。

アレルギー疾患は複数の病気が合併しやすく、  
子どもから高齢者まで幅広い世代に関係する  
身近な病気です。

そのため、各診療科が連携して総合的な治療を  
提供できる体制を整えるために、

「アレルギーセンター」が設立されました。



# アレルギーセンターについて

有病率が高く、増加傾向にあるアレルギー疾患は、国民の半数以上が関わる病気とされています。

帝京大学医学部附属病院では、すべてのアレルギー疾患に対応できる横の連携と、小児科を中心に全年齢に対応可能な縦の連携を組み合わせた包括的な診療を実現するため、2023年より「アレルギーセンター」を設置しています。

## アレルギー性鼻炎

主にくしゃみ、鼻水、鼻詰りを伴う

鼻水・鼻詰まり



## 三大アレルギー疾患



## 気管支喘息

空気の通り道である気道（気管・気管支）が狭くなり、空気の流れが妨げられ、呼吸が苦しくなる。



## アトピー性皮膚炎

顔や首、膝など全身にかゆみを伴う発疹が繰り返し現れる



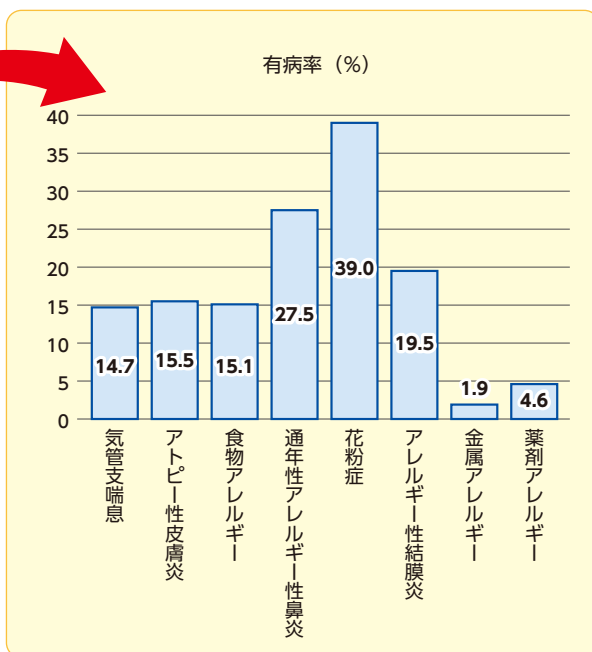
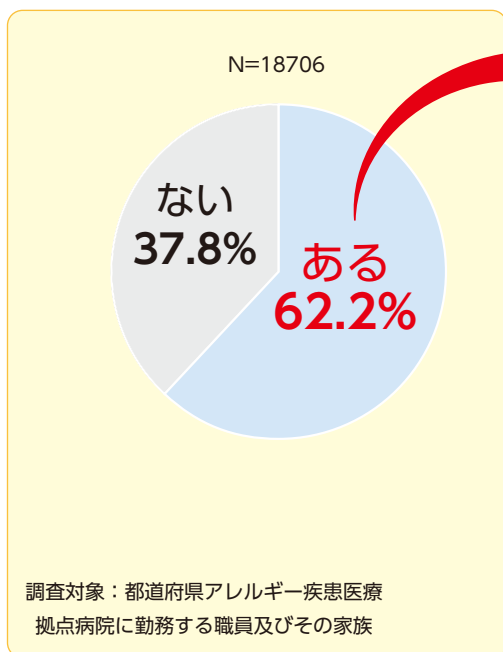
小林茂俊先生 小児科 教授

- 1987年 東京大学医学部医学科卒業
- 1987年 東京大学医学部小児科入局
- 1987年 東京大学医学部小児科研修医
- 1988年 青梅市立総合病院小児科医師
- 1989年 静岡県立厚生連遠州総合病院小児科医師
- 1991年 東京大学医学部小児科医員
- 1993年 東京大学医学部小児科助手
- 1996年 米国NIHにてVisiting Fellow
- 1999年 帝京大学医学部小児科助手
- 2003年 帝京大学医学部小児科講師
- 2009年 帝京大学医学部小児科准教授
- 2012年 現職

# 3人に2人はアレルギー疾患を有する

## 令和3年アレルギー疾患有病率調査

### いずれかのアレルギー疾患



### アレルギーセンターの必要性

アレルギー治療は、症状ごとに専門医を受診することが一般的ですが、「アレルギーセンター」はなぜ必要なのでしょう？センター長の小林茂俊先生にお話を伺いました。

「アレルギー疾患の特徴として、1人の患者さんに複数の疾患が現れることがよくあります。例えば、食物アレルギーの患者さんに花粉症や喘息、アトピー性皮膚炎が同時に現れることも珍しくありません。さらに、これらの疾患は互いに影響し合うことが多いため、症状を効果的に改善するためには、包括的な治療が不可欠です。

アレルギー治療では、特定の疾患だけでなく、患者さんの生活習慣や環境、心身の健康状態全般を考慮した診療が求められます。例えば、花粉症の症状が悪化する時期に同時に喘息がひどくなるケースでは、複数の診療科での治療が必要となることもあります。そのようなとき、各診療科が連携することで、患者さんは複数の医療機関を訪れる手間を省き、よりスムーズに治療を受けられることができます。アレルギーセンターはまさに、こうした診療科の連携を実現するための拠点です。



私自身もアレルギーに悩む一人です。そのため、患者さんの苦勞や不安を身近に感じています。統計的にも、アレルギー疾患に悩む方の数は年々増加しています。医学の進歩によって、新しい治療法や薬剤が次々と登場していますが、それを最大限に活用するためには、患者さん一人ひとりに合ったオーダーメイドの診療が必要です。また、アレルギー疾患全般に精通した『トータルアラジスト』の育成も合わせて行っていかなければなりません。

このアレルギーセンターの設立は、私自身の長年の夢でもありました。専門性の高い医師たちがチームを組むことで、患者さんの負担を軽減しながら、より質の高い医療を提供できる環境を整えることができました。3人に2人が何らかのアレルギー疾患を抱える現代において、このセンターが患者さんにとって頼れる存在となることを目指しています。」

### チーム医療で支える 包括的なアレルギー治療

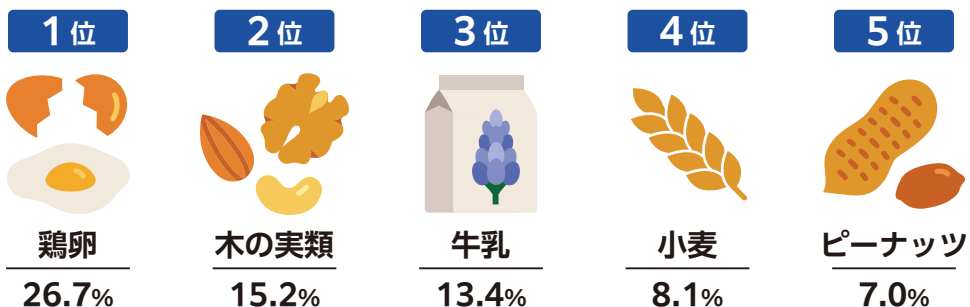
「アレルギーセンターには、どのような診療科が関わっているのでしょうか？」

「帝京大学病院では、食物アレルギーや小児喘息などを扱う小児科、喘息やアナフィラキシーの治療を担う内科、花粉症やアレルギー性鼻炎を診る耳鼻咽喉科、アトピー性皮膚炎などの皮膚科、アレルギー性結膜炎を扱う眼科が中心となっています。また、薬剤部や栄養部、さらには産婦人科など、アレルギー疾患に関係するすべての科が協力的体制を整えています。このように『横の連携』を基盤に、さまざまな科が情報を共有し合い、患者さん一人ひとりの症状や背景に合わせた包括的な医療を提供しています。さらに、母体から高齢者までの幅広い年齢層に対応するために『縦の連携』も重視し、あらゆる世代の患者さんに質の高い医療を届けられる体制を整えています。」

「多くの診療科と連携するにあたり、心がけていることを教えてください。」

「当院には、もともとチーム医療の文化が根付いています。そのため特別な心がけをしなくても自然と医療連携できる環境と意識が定着していると言えるでしょう。しかし、アレルギーセンターを設置したことで、さらに顔が見える関係性が築かれ、以前よりも連携がスムーズになり

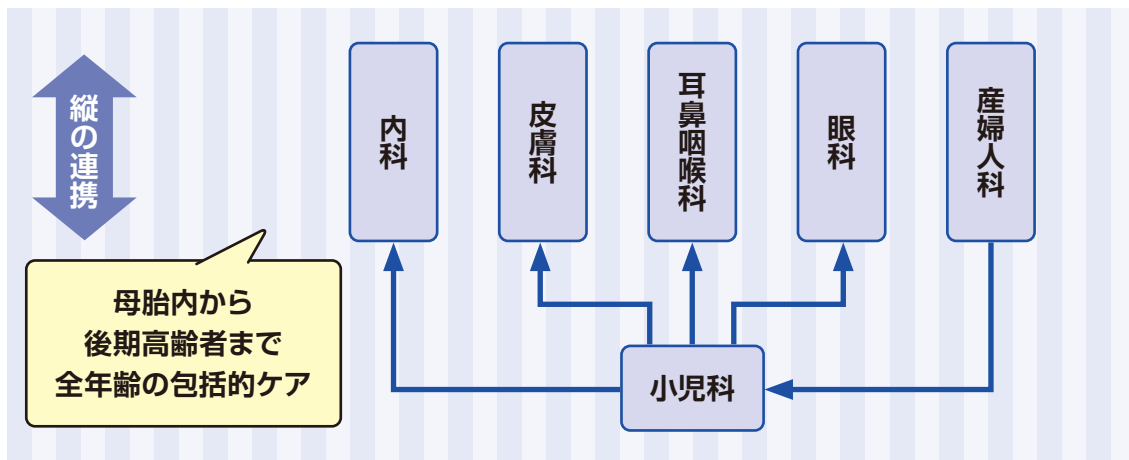
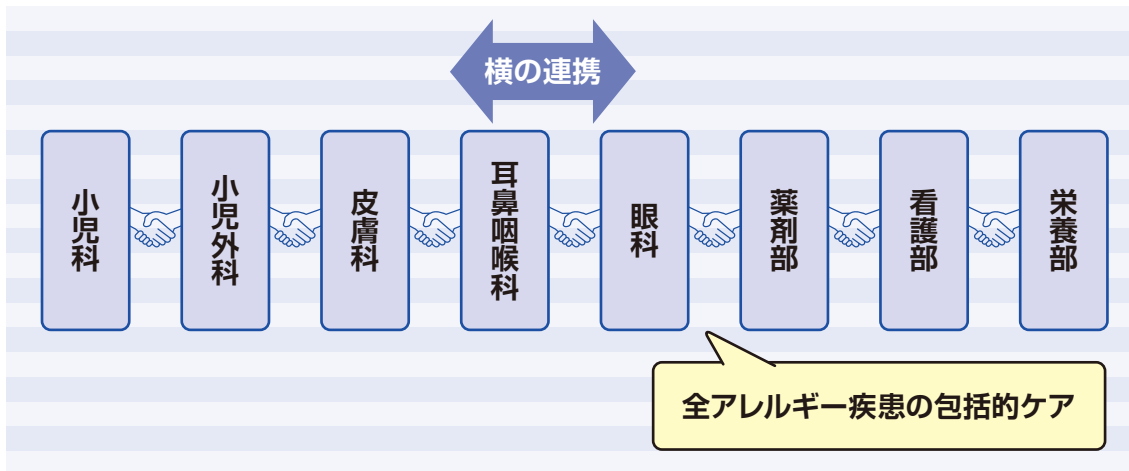
## 食物アレルギーランキング



出典:令和6年度食物アレルギーに関連する食品表示に関する調査研究事業報告書より即時型食物アレルギーの原因食物(類別)

ここ数年で「木の実類」のアレルギーが増えています。とくにクルミが多く、パンやお菓子などで消費量が増えていることが背景にあると考えられています。(2020年「即時型食物アレルギーによる健康被害に関する全国実態調査」より)

横と縦の連携による包括的診療



「アレルギー疾患は、さまざまな病気が合併しやすいという特徴があります。また、アレルギー体質は一生続くことが多いため、子どもから大人、

頼れるアレルギー治療の総合窓口

— どのような方にアレルギーセンターを利用してほしいと考えられていますか？

「アレルギー疾患は、さまざまな病気が合併しやすいという特徴があります。また、アレルギー体質は一生続くことが多いため、子どもから大人、

例えば、小児科の患者さんに皮膚炎の症状が見られる場合、これまでは皮膚科への紹介状を作成し、患者さんが改めて診療を受ける必要がありました。しかし、センター設立後は、皮膚科の医師に直接電話で相談し、その場で適切な対応ができるようになりました。これは患者さんにとつてのメリットだけでなく、医師にとつても働きやすい環境です。また、患者さんの電子カルテは共通化されていますので、情報共有もしやすくなっています。各科の連携が強化されたことで、アレルギーの知見が広がり、病気の早期発見や適切な薬の処方など、スムーズかつ質の高い医療を提供できるようになりました。チーム医療の土壌が整っている帝京大学病院ならではの特徴です」

ました。

高齢者まで、全てのライフステージに対応できる診療が必要です。

例えば、小さい頃に食物アレルギーが発覚し、大人になっても症状に悩まされている方や、喘息とアトピーなど複数のアレルギー疾患を抱えている方、クリニック等での治療がうまくいかず、症状が重い方にもぜひご利用いただきたいと考えています。さらに、『自分の症状は何科で診てもらえばよいかわからない』といった方にも、安心して相談していただけるような窓口としての役割を果たせる場所でありたいと思っています」

——アレルギーセンターの利用方法を教えてください。

「基本的には、外来での診療の中で、各科のアレルギー疾患担当医が総合的な診療が必要かどうかを判断し、必要な科へ紹介する流れとなっています。患者さんの症状や悩みに合わせて最適な診療が提供できるよう、診療科間での連携を大切にしています。診療の中で気になることがあれば、どうぞお気軽にご相談ください。

また、当院のアレルギーセンターでは、医師だけでなく薬剤部や栄養部との連携も行っています。

す。これにより、症状の改善や生活の質を向上させるための具体的なアドバイスやサポートを提供することが可能です。アレルギーに関する食事指導や服薬の相談など、専門的なアプローチも含めた総合的なケアを行っています」

### 地域と共に広げるアレルギー医療の未来

——これからの目標を教えてください。

「アレルギーセンターの連携をさらに強化し、地域に根ざした医療を展開していきたいと考えています。特に、アレルギーについての正しい知識を広める活動に力を入れていきたいですね。

これまでも開催してきた小さなお子さんとその保護者を対象としたアレルギーの講演会は、今後も増やしていきたいと思っています。また、医師会や行政と連携し、学校給食のアドバイザーとしてアレルギー対応をサポートする取り組みも引き続き続けていきます。こうした活動を通じて、学校や保育所、家庭の中でもアレルギーへの理解が深まることを目指しています。

『アレルギーは治らない』と諦めている患者さんにも、当院の取り組みを知っていただきたいと思っています。医学の進歩やチーム医療の力で、

少しでも多くの方が安心して生活できる環境を提供したい。そのためには、地域との連携をさらに強化し、診療だけでなく予防や啓発活動にも力を入れながら、活動の幅を広げていきたいと考えています」







## 「つながる治療で安心を」アレルギー疾患に挑む センターの取り組み

喘息は年齢を問わず発症する可能性があり、アレルギー性鼻炎と併発する患者さんは全体の約7割にのぼります。内科とアレルギーセンターの役割について、長瀬洋之先生にお話を伺いました。

「アレルギーセンターとの連携では、重症喘息の患者さんや、鼻炎や皮膚疾患と気管支喘息の合併症状を持つ患者さんを主に診療しています。

当院では、各診療科にアレルギー診療を得意とする医師が所属しており、内科にも日本アレルギー学会認定のアレルギー専門医が複数在籍しています。また、年代に関係なく幅広いアレルギー疾患を包括的に診療できる医師、いわゆる『トータルアラジスト』の育成にも力を注いでいます。」

——治療の中で気をつけていることを教えてください。

「気管支喘息の患者さんには複数のアレルギー疾

患を併発している方も多いため、喘息だけでなくくしゃみや鼻水などの鼻炎症状や嗅覚異常も必ず確認しています。私たちは『One airway, one disease（ひとつの気道、ひとつの病気）』という考えのもと、気道全体がつながっている視点で治療にあたっています」

——アレルギーセンターの自慢できるところを教えてください。

「当センターは、生物学的製剤の使用経験が日本でもトップクラスで、喘息に関する臨床研究も積極的に進め、安心・安全な治療体制を整えています。」

日本では、成人の食物アレルギーの専門医が少ないことが課題とされていますが、当院では小児科と連携し、成人の食物アレルギーにも対応する体制を整えつつあります。成人の場合、甲殻類やアニサキスが原因となることが多いですね。このような取り組みを通じて、幅広い患者さんに質の高い医療を届けたいと考えています」



長瀬洋之先生 内科 教授

1994年	東京大学医学部医学科卒業、東京大学医学部附属病院内科
1995年	国立国際医療センター内科、呼吸器科（～平成10年5月）
1996年	東京大学物療内科入局
2001年	日本学術振興会特別研究員（～平成15年3月）
2002年	東京大学大学院医学系研究科内科学専攻博士課程卒業
2003年	帝京大学医学部内科学講座 助手、講師、准教授を経て
2016年	同 教授
2018年	McGill大学 Meakins-Christie研究所 Visiting Professor

——今後の目標を教えてください。

「アレルギーセンターの取り組みを、より多くの方に届ける仕組みを構築していきたいと考えています。そのため、センターの存在を広く知っていただき、アレルギーに悩む患者さんが適切な治療を受けられる体制づくりが重要です。

過去には、飲食店でアレルギーを発症し、仕事を続けるのが難しいと悩んでいた患者さんがいましたが、治療により症状が改善し、新しいお店の店長を任されるまでに回復されました。この経験から、治療が患者さんの人生を豊かにする大きな力を持つことを実感しています。

これからもトータルアラジストとして、一人ひとりに最適な医療を提供してまいります」



## 家族で取り組むアレルギーケア 「あれ？」と思ったら小児科へ

小児科では主に、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、小児喘息などの診療を行っています。小林茂俊先生にお話を伺いました。

「小児科は、幅広い疾患に対応するオールマイティな診療が求められる科です。特に小さなお子さんの場合、痛みや痒みといった症状をうまく言葉で伝えられないことが多く、アレルギーが発見されにくいこともあります。そのため、診療ではさまざまな可能性を考慮しながら、包括的な視点で診療を進めるよう心がけています」

——小児科で多く見られるアレルギー疾患について教えてください。

「最も多いのは食物アレルギーの患者さんです。食生活の変化に伴い、アレルギー症状を訴える患者さんが増加しており、アレルギーの種類にも変化が見られます。最近では、クルミなどの『木の实類』が増えており、これはパンやお菓子などで広く使用されるようになったことが要因

の一つとされています。また、『いくら』でアナフィラキシーを起こすお子さんも増えてきています。成長に合わせて適切な時期に、少しずつ食べられるものを増やしていくことが重要です。また、最近では、アレルギーの低年齢化が進んでおり、2〜3歳で花粉症を発症するケースもあります。『食物タンパク誘発胃腸症』や『花粉食物アレルギー症候群（PFAS）』といった新しいアレルギー疾患も増えてきました」

——家族が気を付けることはどんなことでしょうか？

「最も重要なのは、家族でアレルギーに関する情報をしっかりと共有することです。可能であれば、ご両親揃ってお子さんの診察に立ち会っていただきたいと思います。特に、薬の投与方法やアナフィラキシーが起きた場合の対応を知らないとお子さんの命に関わる危険性があります。アレルギーは生活に密着している病気ですので、家族全員でケアできる体制を整えることが大切



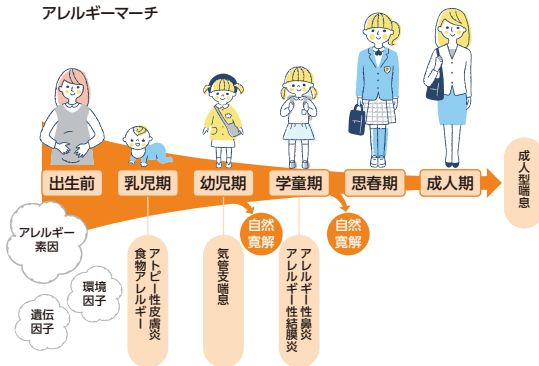
小林茂俊先生 小児科 教授

です。

当院にはアレルギーセンターがあり、他科との連携も可能です。お子さんの体調に少しでも異変を感じたら、まずは小児科へご相談ください」

1987年 東京大学医学部医学科卒業  
1987年 東京大学医学部小児科入局  
1987年 東京大学医学部小児科研修医  
1988年 青梅市立総合病院小児科医師  
1989年 静岡県立厚生連遠州総合病院小児科医師  
1991年 東京大学医学部小児科医員  
1993年 東京大学医学部小児科助手  
1996年 米国N I HにてVisiting Fellow  
1999年 帝京大学医学部小児科助手  
2003年 帝京大学医学部小児科講師  
2009年 帝京大学医学部小児科准教授  
2012年 現職

アレルギーマーチ



成長過程の中でアレルギー疾患が変化することを「アレルギーマーチ」と言います。



## かゆみを減らして、できることを増やす 適切な治療と管理で生活の質を向上

アレルギー症状の中でも特に多いのが、かゆみや皮疹といった「皮膚疾患」です。アトピー性皮膚炎や蕁麻疹の患者さんはもちろん、他のアレルギー症状と併発しているケースも少なくありません。鎌田昌洋先生に詳しくお話を伺いました。

「皮膚科で多く診るアトピー性皮膚炎は、小児の有症率が約10%と言われています。中には『もう治らない』と諦めて痒みを我慢している方もいますが、現在ではさまざまな治療薬が安全に使用できるようになり、治療の選択肢が広がっています。患者さん一人ひとりに合った治療法をご提案しますので、ぜひ諦めずにご相談ください。

痒みで眠れなかったり、勉強や仕事に集中できなかつたりと深刻な悩みを抱えている患者さんも少なくありません。特に塗り薬は1日2回全身に塗る必要があるため、お子さんの場合は家

族の協力が欠かせません。正しくお薬を使うことが、アトピー治療の重要なポイントです」

——アレルギー患者さんが気をつけるべき点を教えてください。

「花粉やダニ、食品など、自分がアレルギー反応を起こす物質が分かっていたら、可能な限りそれと避けることが大切です。また、ストレスが蕁麻疹の原因になることもありますので、規則正しい生活を心がけることも基本ですが重要な対策です。アレルギー症状がない方でも、湿疹やかゆみを感じたら、できるだけ早めに皮膚科を受診し、皮膚のバリア機能が損なわれた状態を放置しないことが大切です。軽い症状であれば薬で治ることが多いので、かゆみを我慢せず早めに対処してください。どんな小さなことでも気になることがあれば、かかりつけの皮膚科にご相談いただければと思います」



鎌田昌洋先生 皮膚科 教授

2004年	東京大学医学部医学科卒業 国立国際医療研究センター 初期研修医
2006年	東京大学医学部附属病院皮膚科 後期研修医 三井記念病院皮膚科 常勤医
2012年	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻皮膚科学講座卒業 東京大学医学部附属病院皮膚科 助教
2013年	米国Duke University Medical Center免疫学教室に留学
2015年	東京大学医学部附属病院皮膚科 助教
2017年	帝京大学医学部皮膚科学講座 講師、病棟医長
2019年	帝京大学医学部皮膚科学講座 准教授、病棟医長
2024年	帝京大学医学部皮膚科学講座 教授

——どんな時にやりがいを感じられますか？

「患者さんの笑顔を見ることが、私たちにとつてのやりがいです。症状が改善し、かゆみから解放された患者さんが『肌がもちもちになった』『温泉に入れるようになった』と笑顔でお話しされるのは、本当に嬉しい瞬間です。かゆみのない生活は、患者さんの暮らしをより豊かで明るいものにすると信じています。

肌のかゆみを改善することは、生活の質そのものに大きく影響します。適切な治療を行い、かゆみのない状態を維持できるよう、患者さんに寄り添いながらこれからも全力でサポートしていきたいと思えます」



## アレルギーの原因はひとつじゃない 様々な要因から最適な治療方法を導く

今や現代病とも言われる「花粉症」、幅広い世代が悩む「アレルギー性鼻炎」など、耳鼻咽喉科とアレルギーは密接に関わっています。アレルギーセンターはどのような役割を担っているのでしょうか？吉原晋太郎先生にお話を伺いました。

「耳鼻咽喉科の疾患は、つらさが他人に伝わりにくいと言われています。鼻水や鼻づまり、喉がれなど目に見える症状もありますが、喉のイガイガ感、においがしない、呼吸がしにくい、耳のつまりなどの症状は共有が難しいものです。私たちは患者さんの悩みを丁寧に向い、最適な治療法を決定しています」

——アレルギー治療で重視している点を教えてください。

「難病に指定されている『好酸球性副鼻腔炎』は気管支喘息と密接な関係があることされ、耳鼻咽喉科だけでなく他科との連携が欠かせません。

アレルギー患者さんには複数の疾患を抱えている方が多く、どの科でどの薬を服用しているか情報共有が重要です。

好酸球性副鼻腔炎では、生物学的製剤をどの科でどのように処方するか、複数のアレルギー症状がある場合どの薬を使うかなど、患者さんごとに異なる対応が求められます。そのため、一人ひとりの症状に合わせた丁寧な診察と治療を心がけています。

患者さんの中にはアレルギー性鼻炎だと自覚していても、実際に診察してみると蓄膿症や慢性的な副鼻腔炎だったというケースもあります。鼻や喉、耳の症状でお困りの際は、自分で決めつけず、一度耳鼻咽喉科で原因をしっかりと調べてほしいですね。治療によって苦しみが軽減し、笑顔を取り戻された患者さんを数多く見ってきました。これからも、ひとりでも多くの患者さんを治療していきたいと考えています」

——チーム医療を進める上で心がけていることを教えてください。

「基本的にはカルテでのやり取りが中心ですが、どの先生が見ても患者さんの症状がわかるよう、わかりやすいカルテ作成を心がけています。例えば、鼻の中の様子を内視鏡で撮影し視覚的に記録したり、治療の経過をしっかりと残すことで、患者さんの改善につながると信じています。

アレルギーセンターは新しいチームですが、他科の先生と直接話す機会が増え、顔を合わせながらアレルギーの情報交換ができるようになったのは非常に良い流れだと感じています。アレルギーは時代とともに変化する病気ですので、新しい情報を取り入れつつ、患者さんが快適な生活を送れるよう連携を強化して治療に取り組んでいきたいです。

耳鼻咽喉科を受診する方だけでなく、喘息で呼吸器内科に通われていて鼻の症状に悩んでいる方も、ぜひお気軽にご相談ください」



吉原晋太郎先生 耳鼻咽喉科 助教

2009年 千葉大学医学部 卒業  
2019年 東京大学大学院外科学専攻博士課程修了  
2020年 東京大学医学部耳鼻咽喉科 助教  
2022年 帝京大学医学部耳鼻咽喉科 助教 (医局長)





## 眼のアレルギー症状は生活の質に直結 QOLを高める治療を目指して

眼科では、アトピー性角結膜炎や春季カタルを併発したアレルギー患者さんが多く来院されます。重症化すると視力低下を招き、日常生活に影響を及ぼすこともあります。三村達哉先生に、アレルギーと目の健康についてお話を伺いました。

「眼科医は、アレルギー性結膜炎の診断や治療計画の提案、患者さんへの指導、他科との連携、治療のフォローアップを行っています。眼科はさまざまな疾患と密接に関わっており、連携が欠かせません。特にアレルギー性角結膜炎では、アトピー性皮膚炎に伴うアレルギー症状や白内障、網膜剥離のリスクに加え、ステロイド剤使用による眼圧上昇で緑内障にも注意が必要です」

——連携する上で特に重要だと感じるポイントを教えてください。

「密接なコミュニケーションと情報共有が最も

重要です。アレルギーセンターには、明るくコミュニケーション能力の高い先生が多いのは帝京の大きな強みだと思います。また、各診療科の先生がアレルギー学会で重要な役割を担っており、最新のアレルギー治療情報を迅速に入手できる体制が整っているのも大きなメリットだと感じています」

——アレルギー患者さんが気を付けるべき点を教えてください。

「自己管理と治療を継続することが大切です。症状が軽くなると治療を中断してしまう方もいらっしゃると思いますが、悪化を防ぐためにも予防的に治療を続けることが重要です。」

眼の痒みや痛み、涙目、赤みは身体的にも精神的にも大きな負担となり、日常生活のQOLに直結します。患者さんがつらい症状で悩むことがないように、私たちも持続可能な治療を提供で



三村達哉先生 眼科 准教授

1997年 山梨医科大学医学部医学科卒業  
1997年 東京大学医学部附属病院眼科  
2004年 ハーバード大学 (MEEI/スケベンス眼研究所) 留学  
2006年 イリノイ大学シカゴ校 (医学部付属病院) 留学  
2007年 東京大学医学部附属病院眼科 助教  
2012年 東京女子医科大学東医療センター眼科 講師  
2015年 同上 准教授  
2017年 帝京大学医学部眼科学講座 准教授 現在に至る

きるよう全力を尽くしていきます」

——患者さんやそのご家族へメッセージをお願いします。

「私たちはアレルギー性結膜炎の治療において、患者さん一人ひとりに合った最適な治療を提供しています。皆さんが笑顔で過ごせる日々を取り戻すお手伝いができることが、私たちの何よりの喜びです。」

どんなことでもお気軽にご相談ください。一緒に最善の治療法を見つけ、快適な生活を目指していきましょう」



## 食物アレルギーの患者さんに安心を届ける 栄養部の取り組み

栄養部の堤遥香さんは、入院が決まった患者さんに食物アレルギーの有無を確認し、安心して入院生活を送れるようサポートしています。

「栄養部では、入院が決まった患者さんのアレルギーの有無を医師や看護師と連携して確認し、病院食の調整が必要な患者さんには個別対応しています。複数の食物アレルギーを持つ方や、調味料に含まれる微量な成分でアレルギー反応を起こす方、食品の加熱・非加熱でアレルギー反応が異なる方など、原因食品や症状は多様です。そのため、複雑な食物アレルギーをお持ちの患者さんには管理栄養士が直接聞き取りを行い、どの範囲まで食品を除去すべきか慎重に検討し対応しています」

——アレルギーを持つ方が、普段の食事で気を

付けるべきことを教えてください。

「加工食品や市販食品では、見た目ではアレルギーを引き起こす「アレルゲン」が含まれているかどうか、わかりにくいものも多いので、アレルギー表示や原材料表示の確認、メーカーへ問い合わせなどを行いアレルゲンを含む食品の有無を確認することが重要です。」

特にお子さんの場合はアレルゲンの除去とともに、成長に必要な栄養を確保することが大切です。そのために代替食品の選択方法や、栄養バランスの整った食事が摂れるようサポートします。栄養相談のご希望がありましたら主治医へご相談ください」

——やりがいを感じることで、今後の目標を教えてください。

「患者さんに直接介入することで、栄養状態が改善し治療に貢献できたときにやりがいを感じま

す。

現在、当院の食物アレルギー対応は入院後の介入が中心ですが、今後は入退院センターやアレルギーセンター等で入院前からアレルギー情報や栄養状態の把握を行い、継続したサポート体制を整えていきたいと考えています。より安心で安全な入院生活で治療に専念できるように、食事やご自身の栄養のことで不安があればお気軽に管理栄養士へご相談ください」



堤遥香さん 管理栄養士  
| 2019年 管理栄養士免許取得



食品表示が義務付けられているのが「特定原材料8食品」です。お菓子や調味料なども確認してみましょう。





## 正しい薬の使い方方で症状改善へ 「治らない」を「治る」に変えるサポート

薬剤部の前田光平さんに、アレルギーセンターでの薬剤師の役割についてお話を伺いました。

「アレルギー治療において薬は欠かせない存在です。アレルギーの分野では、飲み薬以外の薬が重要な役割を果たす場面が多いです。

例えば、アトピー性皮膚炎では軟膏やクリームなどの塗り薬が主な治療薬となりますが、塗る量や回数、使用期間を正しく理解して使用する必要があります。

気管支喘息（以下、喘息）の治療には、さまざまな種類の吸入薬が使用されています。しかし、過去の研究では、患者さんの半数以上が吸入器を正しく使えていないことが明らかになっています。

薬をお渡しするだけでなく、使用方法を丁寧に伝え、患者さんが正しく使えるようサポートすることが、アレルギーセンターにおける薬剤師の重要な役割だと考えています」

——特に気をつけていることを教えてください。

「繰り返しになりますが、飲み薬以外の薬を正しく使えているかを常に意識しています。

アトピー性皮膚炎や喘息だけではなく、鼻炎や花粉症では点鼻薬、アナフィラキシーでは小型の注射器を使用することがあります。これらは正しく使えば非常に効果的ですが、誤った使い方によって症状が改善しないケースも少なくありません。患者さんに最適な使用方法を理解していただけるよう心がけています」

——アレルギー治療薬の進歩について教えてください。

「喘息の治療成績は、この20年で大きく向上しました。以前は年に何度も緊急受診していた患者さんも、薬を自宅で使用することで症状が安定するようになりました。

また、国民病とも言われる花粉症に関しても、治療の選択肢が充実してきています。」



前田光平さん 薬剤部

2008年 帝京大学薬学部生物薬学科卒業  
2010年 帝京大学大学院薬学研究所修士課程修了  
2010年 帝京大学医学部附属病院入職

花粉症は毎年同じシーズンに苦しむ患者さんが多く、仕事の生産性が低下したり、受験生が実力を発揮できなかつたりと、社会問題ともいえる病気です。

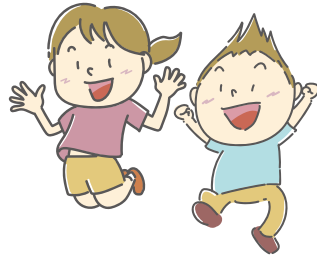
最新の治療方法としては、アレルギーを少しずつ体に慣らしていく免疫療法や、アレルギーを引き起こす特定の物質をブロックする『分子標的薬』と呼ばれる薬が注目されています。

また花粉症の市販薬の中には、病院で使う薬と同じ成分を含むものが増えてきました。一方で一部の点鼻薬では、使い方を間違えると症状が悪化することがあったり、内服薬の中には眠気や口の渇きが強く出る商品もあります。市販薬を使用する際は専門家から正しい知識を得た上で使うことをおすすめします」

## アレルギーに関するQ&amp;A

## Q1 花粉症や食物アレルギーは治るの？

A：食物アレルギーは成長とともによくなることが多いです。花粉症も食物アレルギーも免疫療法（舌下、皮下、経口など）が行われるようになって、根本的に治る可能性が高くなってきています。



## Q2 大人でもアレルギーになるの？

A：大人になって食物アレルギーになる方、喘息が発症する方などは少なくありません。大人は子どもと比べてエビやアニサキスのアレルギーが多く、アレルギーが異なることも。最近では、花粉症のある方が果物などを食べると口の中がかゆくなったり、のどがイガイガしたりする『花粉・食物アレルギー症候群』など、大人の食物アレルギーが問題となっています。

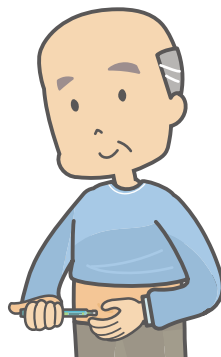
## Q3 乳幼児期のアトピー性皮膚炎はいつ治るの？

A：乳幼児期に発症した場合には成長とともによくなることが多いです。



## Q6 「アナフィラキシー」になったらどう対処したらいいの？

A：アナフィラキシーを疑ったら、すぐ救急車を呼びましょう。アナフィラキシーは強いアレルギー反応で、じんましんがでたり、息苦しくなったり、腹痛・嘔吐があったり、意識がもうろうとしたりと多彩な症状がでます。死に至る可能性もあります。エピペンがあれば、迅速に使用してください。「迷ったら使う」のがよいでしょう。



## Q7 食物アレルギーを確かめる方法はありますか？

A：食物アレルギーの診断には、詳しくお話を聞くことがいちばん大事です。何を食べて、どのくらいの時間で、どこにどういった症状がでたか、どうやって治ったかなどの情報が参考になります。皮膚の症状な

ご覧ください。

アレルギー/pdf/zenbun1.pdf) がわかりやすいのでぜひご覧ください。

ご覧ください。

す。ただし、個人差があり、成人まで持ち越す方も少なくありません。継続的な治療で、皮膚をいい状態に保つことが大切です。



#### Q<sub>4</sub> 治療で使うステロイドって何？

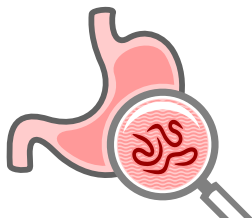
A：ステロイドは副腎皮質というところで作られているホルモンで、生命の維持に欠かせないものです。炎症を抑える作用があるため、様々な治療で使用されます。長期間使用する場合は副作用が心配ですが、副作用をチエックしながら医師の指導のもと正しく使えば、こわいものではありません。最近はステロイドでないアトピー性皮膚炎の薬も増えてきていますので、それらを組み合わせて適正にステロイドを使用していく必要があります。

#### Q<sub>5</sub> アレルギー症状がなくなったら、薬はやめていいの？

A：アレルギーの疾患によって薬の使用法は異なりますが、原則的に医師の指示通り服用することが大事です。自己判断でやめてはいけません。

どは写真を撮っておくといいでしょう。さらに血液検査やプリックテストで確認しますが、検査はあくまで参考で、それだけで診断することはありません。確定するために、負荷試験を行うこともあります。

#### Q<sub>8</sub> アニサキスはアレルギーなの？



A：アニサキス症とアニサキスアレルギーは違うものです。生魚の中にいる寄生虫の一種であるアニサキスが胃や腸に刺さることで、痛みや吐き気を起こすのが食中毒である「アニサキス症」。一方の「アニサキスアレルギー」は、アニサキスのたんぱく質に反応してアレルギー反応を起こしてしまうもの。つまり、焼いた魚や加工食品にも注意が必要になってしまいます。



## 「総合診療科」は、受診科に迷う患者さんの頼れる窓口

帝京大学医学部附属病院では、毎週月曜日の午前中に総合診療科の予約診察を行っています。患者さんを総合的に診療する「総合診療科」では、あらゆる病気に対する基礎知識が求められるそうです。詳しく立澤直子先生にお話を伺いました。

「総合診療科は2023年4月に設立されました。診断がつかない疾患や合併症など、『どの科を受診すればよいかわからない』患者さんを診療し、適切な診療科へ繋ぐ窓口の役割を担っています。基本的には外来診療が中心ですが、入院が必要な場合には対応する診療科をご案内しています。」

総合診療科は、患者さんの診療だけでなく、学生教育のための科でもあります。その背景には、診療科の細分化や専門特化が進んだこと、さらに地域による医療格差の問題があります。どんな患者さんでも診られる能力を養い、そこから専門領域に進むという総合診療的な知識が、これからの医師に求められているのです。

私自身も、総合診療科の医師として外来を担当するほか、救急外来の診療や大学での『臨床推論』や『消化器内科』の授業も担当しています。」

——お仕事をする上で、気をつけていることを教えてください。

「総合診療科は、ほとんどすべての科や部門と関わるため、コミュニケーションが非常に重要です。当たり前のことですが、日頃からの挨拶を大切にし、学生から医療スタッフまで分け隔てなく良好な関係を築くことを心がけています」

——お仕事の中で印象に残っていることを教えてください。

「救急外来では研修医と一緒に患者さんを診ることが多いのですが、『先生と一緒に働いて勉強になりました』と言ってもらえたときは、とても嬉しく、もっと頑張ろうという気持ちになります。」

私自身、大学を卒業して医師になり、結婚・妊娠・出産を経験しながら、現在は育児をしつつ働いています。そのため、学生から『女性としてどうキャリアを築けばよいか』と相談を受けるのはとても嬉しいことです。多様性が認められる時代にはなったとはいえ、妊娠中や子育て中の予測できない悩みは依然として多いものです。働く女性医師のロールモデルとして、自分の知



立澤直子先生 総合診療科

1998年 帝京大学医学部卒業 帝京大学医学部内科学講座入局  
2004年 帝京大学大学院医学研究科博士課程修了(消化器肝臓病研究室)  
2004年 2007年 Keck School of Medicine of University of Southern California留学  
2007年 帝京大学内科学講座 助手  
2009年 帝京大学医学部附属病院ER出向  
2023年 帝京大学医学部総合診療科 講師

識や経験を学生・若手医師たちに伝えていきたいと思っています」

——今後の目標を教えてください。

「総合診療科のニーズは、今後さらに拡大していくと考えています。日本のどこにいても患者さんのお困りごとに寄り添える医療を提供し、総合診療に携わる医師を増やしていきたいと思っています」

### MY FAVORITE



娘の趣味に付き添うことで、家族に相撲好きはいなかったのですが、娘は2歳の頃から食い入るようにテレビを見ており、一緒に観戦し力士は朝乃山関・翔猿関・遠藤関・大の里関です。

帝京大学医学部附属病院ホームページ

04 病院のご案内 ▶ ウェブマガジン T-ch「ティーチ」

より閲覧できます。

または右記の二次元バーコードをスマホで読み取っていただくと、直接閲覧できます。ぜひご覧ください。



ウェブマガジン T-ch「ティーチ」コンテンツ一覧

No.1	CKDってなに？
No.2	肝臓・膵臓とアルコールについて 一耳の痛くないお話ー
No.3	妊娠と薬の話
No.4	突然線が曲がって見えたら？
No.5	わかってきたアトピー性皮膚炎
No.6	においがしない？ 好酸球性副鼻腔炎の話



ホームページ上で気軽に読んでいただけるようなウェブマガジンT・ch「ティーチ」。

T・ch「ティーチ」は、各専門分野の疾病や治療方法などを紹介するウェブマガジンです。

- T・Teikyo 〓 帝京大学医学部附属病院の頭文字
- ch・Channel「チャンネル」
- Teikyo Web Channelを略して「T・ch」としました

また、「ティーチ」には「teach」教える」と意味も込められています。当院の様々な取り組みを発信するページです。

P.2  
クロスワードの  
答え

1	フ	2	ジ	3	ビ	4	タ	5	イ
6	リ	7	カ	8	ン	9	ン	10	ン
11	マ	12	ン	13	キ	14	カ	15	
16		17	フ	18	ソ	19	ウ	20	
21	ソ	22	リ	23	イ	24	ズ	25	

カ <sub>A</sub>	フ <sub>B</sub>	ン <sub>C</sub>
----------------	----------------	----------------

—— 理念 ——

患者そして家族と共にあゆむ医療

—— 基本方針 ——

安心安全な高度の医療  
患者中心の医療  
地域への貢献  
医療人の育成  
医学研究の推進



## 帝京大学医学部附属病院

〒173-8606 東京都板橋区加賀2-11-1

TEL.03-3964-1211(代表)

<https://www.teikyo-hospital.jp/>

院内誌についてのお問い合わせ先

帝京大学医学部附属病院 広報委員会

E-mail:kohoiin@med.teikyo-u.ac.jp